

## 美郷の春

美郷の春は美しく快適である。青葉が日に輝き、薫風が頬をなでる。大地から生気が湧き上がり、花が咲き、鳥が囀る。人々は田畑に朝早くから出掛け自然と共に生きる喜びを噛みしめながら仕事に精を出す。

まさに、「時は春、日は朝、朝は七時、片岡に露みちて、揚雲雀なのりいで、蝸牛枝に這い、神、そらに知ろしめす。すべて世は事も無し。」の世界である。この詩は、ロバート・ブラウニングの「春の朝」で、上田敏の名訳で世に広まった。口ずさむと、心に豊かさが広まってゆく。春の風情に国境はなく、人の心にも国境は無いことを示している。

中国にも、春の田園風景の詩がある。先ずは、杜牧の「江南の春」。「千里鶯啼いて、緑紅に映ず。水村山郭酒旗の風。南朝四百八十寺。多少の樓台煙雨の中」。この詩は七言絶句の名作として親しまれている。中国の長江下流一帯を江南地方と呼ぶが、その春の様子が迫真してくる。一句と二句は、言葉の彩を十二分に発揮していて、万感胸に迫るものがある。また、寺を人家に喩えれば、この風景は美郷のものになる。

次は、高啓の「胡隱君を尋ねる」。「水を渡りまた水を渡る。花を看また花を看る。春風江上の路、覚えず君が家に到る」。川沿いの路を、ゆっくりと春を楽しみながら、知り合いを尋ねる様子がよく分かる。覚えず君が家に到る、という表現が、時間と場所を忘れて田園風景を堪能し溶け込んでいることを示している。これも美郷の風景に重なる。

風景を言葉に表すことによって、その美しさと感動を更に深めることができることをこれらの詩は証明している。それは言葉と文芸の力である。そして、文芸は、時代と国を超えて人類に普遍である価値を表し伝えていることが分る。あなたも自然を、文芸を通して楽しみませんか。

## 山更幽

ここ四年ほど奥羽山脈で山仕事をしている。山にいるとセミの声と共にホトトギス、ウグイス、カッコウなどの鳥の啼き声が印象的である。そんなことを考えていたら、中国南京にある孫文の中山陵でセミ時雨を聴きながら中国の友人から教わった次の対句を思い出した。蝉噪林愈静、鳥鳴山更幽（セミさわがしく林いよいよ静か、鳥鳴いて山更にしずか）。これを聞いたときは、成程と感心し、即座に松尾芭蕉の「閑かさや岩にしみ入蝉の声」は、この句のパクリかと考えたものだ。この対句は王籍の作らしい。その後、何かの本で王安石が王籍の対句を念頭において作ったという表現に出合った。一鳥不鳴山更幽（一鳥鳴かず山更にしずか）。この表現も面白いが、経験から推すと王籍の方が良いと思ったことがある。その当時は鎌倉に住んでいて、山行は滅多にしなかった。頭の中で考えたことであつた。

しかし、美郷に来て山の魅力を十二分に満喫している感覚の中で改めて王籍と王安石の表現を考えてみたら興味深い。鳥声や蝉声は、幽やかな時空間を切って新たな境地を生み出すものだということが分ってきた。その声の後に、新たな時空間としての静かさ

や幽かさが感じられるのである。それは文章表現上の体言止めが、余韻を生み出す効果に似ている。幽玄という表現は中国で生み出されたが、これは全世界の山に共通する特性だろう。山林のあらゆるものは、この「山更幽」というコンダクトに合わせて、まるで交響曲を織り成しているような調和がとれたシステムになっているように思えて仕方がない。それが造化の妙なのだろう。更に、杜甫は同じ主題を次のように表現した。伐木丁丁山更幽（伐木トウトウ、山更に幽か）。トウトウは木を切る音である。これは詩経からの引用だということから奥が深い。あなたはどの表現を好みですか。